

蛭をめぐる ～蛭気楼の協道～

石須 秀知（魚津埋没林博物館）

蛭気楼の語源は『史記・天官書』などに見られる“蛭”が吐く“気”が“楼”（楼台、楼閣）をかたどるという記述とされる。

蛭には、二枚貝類と龍類の2種類があり、どちらも蛭気楼の原因生物とされる（本草綱目など）。しかし図像として表現される場合、大ハマグリが気を吐き楼閣を現出させる図が圧倒的に多い。

一方、龍類の蛭を表現したものとしては、楼閣を伴わず気だけを吐く形での立体造形物が知られる。代表的なのは、社寺に寄進された銅製の灯籠の笠につく蕨手（わらびて）の部分に“蛭”（龍類）の頭部（～体の一部、あるいは全身まで）を付け、口から吐き出す気を（1～）2～3本の巻き上がった曲線で表現したものである（図1）。また社寺建築の軒下などの装飾として気を噴き上げる木彫の蛭が取り付けられる例もある（図3）。



図1 “蛭”銅灯籠の例（上野東照宮）

これまでに、当会 ML や実地訪問、WEB 検索などで把握されてきた物件は、金属製と木彫合わせて180件を超える。これらをリスト化することで、蛭の立体造形物がいつごろ、どこから普及してきたのかが少しずつ見えてきた。

§ 一番古いのは？

現在把握している“蛭”物件中（以下の議論も同

じ）、最も古いのは日光東照宮の銅灯籠の1基（図2）で、元和3（1617）年、久能山からの遷座年に、土佐藩主松平土佐守忠義が寄進したものである。次いで、慶安3（1650）年に造られた日光東照宮奥宮唐門（鋳抜門）の左右1対の蛭（図3）が古い。

金属製・木彫合わせて“蛭”物件を古い順に並べると、享保2（1717）年までは銅灯籠一色である。



図2 既知最古の“蛭”銅灯籠

§ 古い“蛭”銅灯籠の寄進者と寄進先分布

1717年までの“蛭”銅灯籠は、徳川将軍家の廟所・菩提寺に諸大名が寄進した物（後の他所への移設を含む）、徳川家関係者から社寺等へ寄進された物など、ほとんどが徳川家や武家に絡んだものである。またそれらの大半は江戸、日光、水戸など関東圏に偏在し（表）、例外は桂昌院（家光の側室・綱吉の生母）が寄進した法隆寺と春日大社（いずれも奈良県）の灯籠ぐらいである。

そして、1717年以降、徳川・武家系の“蛭”銅灯籠は急速に数を減らす。しかし、蛭は銅灯籠を飾

るオプションパーツの一つの「様式」として定着し、各地の社寺に民間が主体となって寄進されていく。

§ 社寺木彫装飾の隆盛と背景

1720 年ごろを境に”蟹”銅灯籠が減少する一方、ほぼ同時期に社寺の木彫装飾が隆盛・複雑過剰化し、その中に蟹が出現・増加する。江戸時代の社寺木彫装飾の蟹は、既知最古の享保 7(1722)年以降、少なくとも 48 件の現存を確認している。その分布も灯籠同様に関東圏に偏在し、特に群馬県、埼玉県、北関東が異様に多い(表)。

エリア別 江戸期 物件			
エリア名	件数	金属	木質
北海道	0	0	0
東北	3	2	1
関東	83	35	48
北陸甲信越	5	3	2
東海(含三重)	2	1	1
近畿(除三重)	5	4	1
中国	2	1	1
四国	5	5	0
九州沖縄	1	0	1
国外	2	2	0

表 エリア別の”蟹”物件数

北関東に多い複雑過剰な社寺彫刻については研究が進んでおり、その背景も明らかになっている(伊東 1991、山下 2019 など)。日光東照宮は元和 3(1617)年の遷座後、寛永 13(1636)年に家光によって華やかな社殿や陽明門の一大造替が行われ、以後江戸時代中にもたびたび修復が繰り返されてきた。その修復工事に招聘された”彫物大工”たちが北関東に定着し、その技巧をもって手掛けたのがこれらの社寺彫刻群とされる。日光東照宮の木彫群の中に蟹は確認されていないが、鋳抜門や銅灯籠の蟹は彫物大工たちの目に留まり、影響を与えていたのではないだろうか。木彫の蟹の造形には、東照宮の鋳抜門や銅灯籠の蟹との類似性(おかつ

ぱ頭、巻き毛の表現、口縁の波うちなど)が認められるものもある(図 3)。



図 3 上：吾嬬(かづま)神社(群馬県中之条町)の木彫
下：日光東照宮鋳抜門装飾

以上、銅灯籠も木彫も日光東照宮が端緒という図式が見えてきた。とはいえ、そもそも最初にどのような経緯で銅灯籠などに蟹のデザインが組み込まれたのか、ルーツは未だ不明である。

★”蟹”の物件リスト(Excel ファイル)は、日本蟹気楼協議会のメーリングリストで共有。

★物件位置をプロットしたマップは、下記の URL で閲覧可能(URL 共有者にのみ公開・WEB 検索では表示されない設定)

『全国「蟹」参りマップ』

<https://www.google.com/maps/d/u/1/edit?mid=1tYzzZIASsFlTjAIHkVg00KYqW-HuoI4&usp=sharing>

(参考文献等)

『関東の彫物大工の系譜と幕府彫物大工棟梁高松家』(日本建築学会計画系論文報告集第 420 号)、伊東龍一、1991 年

『国宝「歓喜院聖天堂」を拠点とした彫刻師の系譜—極彩色彫刻の美と技術をめぐって—』(長慶寺・北関東社寺彫刻シンポジウム報告)、山下祐樹、2019 年